

足立区議会議員 ただ太郎 様

足立区議会議員 5 番 小林 ともよ 印

一 般 質 問 通 告 書

今定例会に下記要旨の一般質問を行いたいので、会議規則第59条第2項の規定により質問通告書を提出します。

記

行政区分	質問の要旨
<p>1 教育指導行政</p>	<p>I.不登校対策について</p> <p>1. 全国の子どもの不登校はこの10年で3倍と急激に増加し、小中学校あわせて35万人近くになり、足立区も1,542人になっている。これまで少なかった小学校低学年でも増加傾向にある。子どもが不登校になり、保護者自身も離職せざるを得ず、社会から取り残されてしまう状況は深刻だ。また、教員の多忙化は子どもの変化に気づけず、子どもを置き去りにしてしまう環境を生み出している。</p> <p>特定非営利活動法人多様な学びプロジェクトによる「不登校のこどもの育ちと学びを支える当事者実態ニーズ全国調査」(以下、全国調査)では不登校を経験した子どもたちから共通で「学校は忙しい」との言葉がでており、教員の多忙化と子どもたちの多忙化は連動している。</p> <p>足立区ではあだちスタンダードのもと、小学2年生から新学期がスタートする4月に学力調査をおこなっている。点数競争に子どもと教員を巻き込み、学年末から新学期に過去の問題を何度も解かせ、競争させることは本来、新しい仲間や先生と楽しい時間を過ごし、信頼関係を築くための時間を奪い、ワクワクするはずの学校を楽しめない学校にしている。</p> <p>また「競い合いながら成長できる」教育環境を整備するために「適正規模・適正配置」(統廃合)をすすめるようとしているが、毎日、通う学校が競争する場所では生徒や教員の心が疲弊するのも当たり前だ。統廃合された新しい学校では、子どもたちが荒れてしまうことが起きている。「通っていた学校とともに自分たちの文化がなくなってしまったという喪失感があり、子どもの心を一層不安定にする」と統廃合を経験した教員は分析している。小さな規模のゆとりある学校を選択肢として残すことが求められている。</p> <p>区は第2期足立区教育振興ビジョンで先生と生徒の距離が近い「居心地のよい学校」の実現をめざし、「正解主義的な教育から児童生徒主体</p>
	<p>9月9日 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">午前</span>・午後 10時00分受付 質問時間 13分</p>

行政区分

質問の要旨

の教育への転換」を掲げた。教員がゆとりを持って子どもに接することができる、子どもが安心して通える、不登校を生み出さない学校にするために先に述べたように公教育のあり方を大きく転換させることが求められていると思うがどうか。

## 2. 不登校支援事業の改善・拡充について

### (1) スクールアシスタントについて

一度、不登校になってしまうと、学校に登校することや、外出することへのハードルが高くなる。不登校にさせない対策が必要だ。子どもが不登校になってしまった保護者から届いた声を紹介する。「通常級に通っていましたが、理解するのがゆっくりで、授業もついていくのが大変でした。また学校の時間割、移動時間もバタバタしていて、時間に余裕がなく、指示がわからず、置いていかれがちでした。教室移動で行く場所がわからずに、一人でポツンと迷っていたこともありました。支援する人をつけてもらえないか、相談したところ、「おとなしく座っている子にはつけられない。授業の妨げになってしまう子どもでないとつけられない」と言われ愕然としました。それで段々行けなくなりました」とのことだ。スクールアシスタントを集団行動が苦手だったり、指示や授業を理解するのがゆっくりで集団についていけないなどの理由で困っている子どもにも適用するべきと思うがどうか。

### (2) 上からの押し付けではなく、子どもの選択の尊重を

不登校が急増した事態を受けて、足立区でも様々な不登校対策を拡充している。しかし、どの支援も相談員と面談を繰り返す中で、どの支援が必要か相談員が決定し、子どもが主体的に選べるものになってない。学校には行けない児童・生徒が、チャレンジ学級を選んだとしても、「学校に行きたいという意思を表明しなければ体験通級扱いになる」と説明された保護者がいる。区は「通級にするには安定して出席できるかどうかで判断する」が、不登校になってしまった子どもに安定性を求めるのはハードルが高い。子どもたちの意思を尊重し、子どもが自ら選択できるようにするべきではないか。

### (3) 不登校児への支援事業について

#### ① チャレンジ学級について

(ア) 小学生が自宅から離れた施設を利用する際、保護者による送り迎え

行政区分

質問の要旨

が必須になるが、チャレンジ学級は午前9時～12時までの短時間利用のため、保護者も近くで待機するなど、かなりの負担となっている。小学生もお弁当を持参して午後まで利用できるようにするべきではないか。

(イ)チャレンジ学級を希望した保護者からは「支援を受けようと5月に相談したが、様々な手続きや面談などがあり実際に体験が始まったのは11月になった。時間がかかりすぎる。」との指摘があった。教育相談員を拡充し希望すればすぐに支援できる体制を強化するべきだがどうか。

#### ②あすテップについて

あすテップは教員の配置も手厚く、ほぼマンツーマンで指導してもらえ、不登校になった生徒も個性を發揮でき、生き生きと過ごせる環境が整っている。SSRは不登校になる前の段階で、自分の教室に入れなくなってしまった子どもたちが逃げ込む場として設置された。これを利用する生徒を単純に元の教室へ戻すか、不登校にしてしまうかという選択肢だけではなく、あすテップへつなぐ選択肢も重視すべきではないか。

#### ③不登校児童・生徒に対する居場所支援事業について

不登校児童・生徒に対する居場所支援事業は利用人数が他の支援事業より多い。しかし、区内に4ヶ所しかなく、小学生は高学年しか利用できない。自転車での通所もできるが、自宅から遠く保護者による送迎ができない場合は利用できない子どももいる。実施場所を中学校区に一つにするなど増設し、小学生低学年からも利用できるようにするべきと思うがどうか。

#### ④学びの多様化学校について

学びの多様化学校へ入学を希望し、受検したが「落ちてしまった」生徒がいる。定員に余裕があっても、面談によって入学させるかしないかは学校側が決定するシステムだからだ。やる気を出した生徒の気持ちを砕くことがないように、区としても様々な学びの多様化学校を紹介するなど、受験料の負担軽減を含め、積極的に支援をするべきと思うがどうか。

#### ⑤別の公立学校への転校について

登校渋りや不登校になった児童生徒が他の公立学校への転校を希望した場合、校長先生との面談があり、嫌な思いをし、かなりハードルが上がったとの声も届いている。学びを保障する観点から児童生徒が希望すればスムーズに転校できるよう、校長先生ではなく、区が相談にのり、転

校を支援するべきと思うがどうか。

#### ⑥SSRについて

区は不登校渋りの子が利用できる SSR を中学校では全校設置を目指しているが、小学低学年が利用できる支援はチャレンジ学級しかない。小学校にも直ちに SSR を設置するべきではないか。

#### ⑦小規模校の役割について

不登校の子どもたちの転校先として、小規模校が選ばれているという実態がある。児童生徒数が少ないからこそ、手厚い指導ができる小規模校は不登校対策としても重要な役割を担っていることは明らかだ。小規模校を統廃合で無くしてしまうのではなく、選択できるように残すべきではないか。

⑧鎌倉市の図書館では、一番敷居の低い公共施設は図書館だという概念と「司書から利用者には基本的に話しかけない」という常識の元、図書館を子どもたちの居場所にする取り組みを進めている。ヤングアダルトコーナーは本棚で囲まれ、違う世代と交わりにくい工夫がされているが、足立区でも図書館を「学校はどうしたの」などと話しかけられない安心して休息できる、家でも学校でもない居場所と位置付けるべきと思うがどうか。

#### 3. SSW について

SSW は学校だけでなく児童生徒の家庭の困難にも寄り添い、社会制度につなぐことができ、子どもの貧困や不登校の解決にもつながる重要な職だが、会計年度任用職員で定期昇給もない。貴重な人材が他に流出してしまうことを避けるため、正規採用や昇給の仕組みをつくり、人材を育成し、少なくとも中学校区に1人以上配置をするべきではないか。

#### 4. 不登校の子のその後の進路について

不登校の子をもつ保護者の最大の関心事の一つは「学校へ行けなくても高校卒業程度の資格をどうしたら子どもがとれるか」ということだ。令和5年度の中学3年生の不登校生徒数は369名、そのうち269名が進学を決定したということだが、残りの100名の進路は把握できていない。全ての不登校生徒の進路を把握した上で、頑張っって高校に進学しても、また不登校になってしまう実態も鑑み、その後の支援につなげていく必要があるのではないか。

	5 番 小 林 ともよ
行 政 区 分	質 問 の 要 旨
2 都市建設行政	<p>5.不登校の子どもたちと保護者の心理的負担を取り除く対応について  何より、不登校は子どもたちの心のSOSであり、「心の傷への理解と休息・回復の保障」が必要だ。全国調査で「不登校の子どもにとって嬉しかったこと」の一位は「不登校を認められる・理解される」で、その一方で嫌だったことの一位は「登校強制・登校刺激・望まぬ干渉・接触」だ。</p> <p>しかし、区の不登校支援ポータルサイトには、最初に支援メニューがずらりと並び、区が作成した「登校支援ガイド」には保護者や子どもを安心させる言葉が詰まっているが、すぐにたどり着ける場所がない。「不登校の子どもには休息が必要だ」ということや、「子どもが嫌がる登校刺激は逆効果になる」ことを伝え、子どもと保護者が良好な関係でいられるように「登校支援ガイド」をポータルサイトのトップページにまず表示するべきではないか。また、すべての保護者、児童生徒、教員の間で不登校について共通の認識を持てるよう周知するべきと思うがどうか。</p> <p>II.常東地域オンデマンドタクシー「チョイソコ×せんじゅ」について</p> <p>今年8月5日から常東地域では区の地域内交通サポート制度を利用したオンデマンドタクシー「チョイソコ×せんじゅ」の実証実験が開始された。</p> <p>運行日は週2日、運行時間8時から15時の6時間で、電話予約は運行曜日の利用時間内だけだ。登録者数308名の区が調査したアンケートでは150名が、利用の目的を「病院等の通院」だと答えている。</p> <p>1. 実態把握について</p> <p>病院は曜日によって医師や診療科目が異なるため、実験開始後も多くの方が利用できない。長野県木曽町では町民である高齢者から「観光や遊びでもない。病院にだけは行かせてほしい」、この声を受けて、東京より先駆けて地域内交通を充実させてきた。実験段階だからこそ、運行日数、運行時間を多く設け、どの曜日、どの時間帯、どのような利用者が、どこへ行くのかなど調査するべきではないか。</p> <p>2. 運行日数について</p> <p>月曜日から金曜日までの週5日運行し、どの曜日でも安心して通院できるようにするべきと思うがどうか。また、土日は利用できないため、車がない世帯は休日診療を受けることが困難だ。行先を休日診療所に限って、土日運行、地域を超えての運行を検討するべきではないか。</p>

行政区分	5番 小林 ともよ 質問の要旨
	<p>3.予約時間について</p> <p>予約は利用の1時間前までとなっているため、診察時間の終わりが読めない通院利用者は帰りの配車を予約できない。予約できる時間を利用の15分前までとするなど短縮するべきではないか。</p>